

永 久 平 和

石原莞爾自筆

第134号
(平成27年10月25日)

目次

巻頭言 オオカミ復活と平成日本の責務 山崎八九生	1
●石原完爾と満州事変 田中良則	2
◆【連載】 蜃気楼の国・満洲国(その2)…… 坂本進一	4
●石原莞爾の「戦後」を歩く④……	6
●昭和天皇の御製⑨ 岩崎章次	8
●法要報告 会員便り	8
●編集後記	12

宣言(昭和31年協和会「昭和革新論」より)

- 1、人類歴史は最終戦争時代に突入し、世界の統一は眼前に迫った。われらは最小の犠牲をもって、新しい歴史を開こう。
- 2、都市解体、農工一体、簡素生活、この三原則によって新日本を建設し、搾取と戦争のない、人類次代文化の先駆となろう。
- 3、東亜に対する過去の態度を深く懺悔し、まず近隣と道義によって固く結び、ひいて永久平和の実現に邁進しよう。

オオカミ復活と平成日本の責務

山崎八九生



平成二桁になった頃から、農山村地域での「増えすぎた」シカやイノシシによる森林や農作物への被害が深刻化していることが都会に生活している人たちの間にもようやく知られるようになってきた。「増えすぎた」原因として、①農山村の過疎化、②猟師の高齢化による狩猟の減少、③農作物の放置と生ゴミの不始末や餌付け、④地球の温暖化による凍死の減少が指摘されているが、その最大原因はオオカミを絶滅させたことである。

また食害の対策にしても、①里山に緩衝帯を設け、田畑との境界線上に柵を設置、②電気柵やトタンなどの防護柵で田畑を囲う、③皮はぎ防止の樹木のネット掛け、④捕獲や追い払いといった、これまでに既に試みられ、その効果の割には、設置や維持管理に莫大な費用と労力がかかり、地方自治体の財政をより一層悪化させる弥縫策しかされてこなかった。そのためいくつかの自治体は、抜本的な改善策は最早オオカミの復活しかないことに気付き初めている。

しかし、ワシントン条約の対象となっているオオカミの再導入には、農水省や環境省などがその重い腰を上げなければならぬが、霞ヶ関の多くの官僚たちの認識はまだそこまでは至っていない。さらに、かなりの日本人がいまだに明治時代のからの「赤頭巾ちゃん」症候群のオオカミ感を抱いたままであるため、オオカミ再導入によるアメリカやドイツの自然の回復やオオカミとの共存の実例、オオカミがヒトを

襲うことは事実上ないこと、家畜への被害も少なくとも日本の場合には殆ど考えられず、たとえあったとしても、現在のシカやイノシシの被害とは比較にならないほどであること一つ一つ示しながら地道に洗脳を解くしかないだろう。

明治時代に日本からオオカミを絶滅させてしまった我々日本人だが、明治以降の急速な近代化の課程の中で犯してしまった罪過のツケが平成になって回ってきた感がある。「光ある所に影あり」のたとえの通り、西洋列強を模倣して近代国家に変貌したことで列強の植民地にならずに済み、日本語と日本文化を守ったことが明治の「光」としたら、他方、山地に囲まれた稲作民族の日本人が、牧畜民族の身勝手なオオカミ感をそのまま受け入れて、これまで「大口の真神^{まがみ}」として素朴に崇めてきたオオカミを滅ぼしたのは明治の「光」から生じた「影」である。アトラトルに代表される槍投器や弓矢と言った「飛び道具」の発明、さらにはオオカミからイヌを創り出したことで、人類はスーパーハンターになり、今や地球上に73億超というとてもない数に異常繁殖している。「地球にやさしく」というが、究極の「地球にやさしい」形とは、人類がこの地球上からいなくなることもされない。しかし、それは種としての自己否定の矛盾である。

人類が地球環境にとって有害な存在であるのなら、その有害性を軽減させることこそが現在の人類に課せられた責務であり、そこには人間中心主義と言う意味でのヒューマニズムを越える新たな哲学が求められる。日本におけるオオカミの復活もそのような一例であり責務でもある。

山崎八九生(やまざき・やくお)……昭和29年(1954年)生れ。東京都練馬区在住の行政書士。

本業の傍ら、練馬区役所・暮らしと事業の手続き相談相談員、一般社団法人・日本オオカミ協会監事、世界連邦日本国会委員会(参議院第一別館内)副責任者、石原莞爾平和思想研究会事務長等の役職に就く。

ライフワークとして、軍事問題、旧日本陸海軍兵器、原子力問題の研究を行う。